



「おふでさき」の一首から着想を得た「根」のオブジェと榎本さん。「芸術は見る人に元気を与える」と

「芸術作品は、見る人に元気や勇気を与える力がある」

オーストラリア・ウィーン在住の榎本ひさ(30歳・飛鳥分教会教人)は画家。東京の創形美術学校を経て、ウィーンの国立美術アカデミーで抽象画を学んだ。卒業後は現地にアトリエを構え、絵画やオブジェを制作するが、昨年8月を機に日本芸術家クラブ展を開催。「おふでさき」の「をさきのねへ」と題した事なるハ、またハをくぐるぬさかいてる」(3号)から着想を得たという根をイメージしたオブジェを約2カ月かけて作り上げた。



顕微鏡の開発を通して、遺伝子スイッチの解明に挑む榎本さん

人々の存在を感じ、大きな支えられた」と謝辞を寄せられた。こうした取り組みは現在、シリヤ難民の子供たちを支援する活動へと発展。トルコ南部を会場とする同様のワークショップでは、ある子供が描いた鮮やかな水色の鯉が印象に残った。「心理的背景からか、土っぽいような暗い色を使う子も少なくない中で、ワークショップを通じて少しでも明るいイメージを持てたのかな」と話す。このとき合作した天鰻のほりは、制作した子供たちへの寄付を募るチャリティイベントもより、ウィーンでの各種イベントでも展示している。

顕微鏡のプロフェッショナルとして、全国の研究者との共同研究に携わる榎元在(34歳・熊本大教会)も活躍中だ。「いまの創作環境は、陽気らしくするための親神様が与えられたもの」と感じている。これからは新しい表現方法を取り入れながら、見る人たちに喜んでもらえる作品を生み出していきたい」

海洋生物の生態に興味を持ち琉球大学へ進学したが、遺伝子研究の世界的権威である村上和雄・筑波大学名誉教授の著書にふれ、遺伝子スイッチの不思議さに惹かれた。「学生生徒修養会・大学の部」を受講した際に、講演講師を務めた村上氏と初めて面会し、「私を超える科学者になってほしい」と書き添えられたサインをもらった。その後、北海道大学大学院で村上氏の弟子に当たる教授から、スイッチの制御を果敢とすタンパク質の動きを可視化できる

顕光顕微鏡について学んだ。タンパク質の大きさは極微の数千ナノ。従来の光顕微鏡では約200ナノ、研究の末、約50ナノにまで解像度を高めた。「細胞を微小なものを実際に見る」と、一つひとつが繊細に巧妙なつくりになっており、その美しさに感銘を受ける。海外で出会った研究者から、「生命の美しさは神業しか思えない」との声を聞く中で、かきもの・かきものあがたさをより一層感じていた。

目標達成のためには、顕微鏡の識別能力をさらに10倍高める必要がある。10日以内の達成を目指す。また、各種の共同研究を通じて、医療の発展にも寄与している。「遺伝子スイッチの動態を観察できたのは、その先には、多くの人の手ばかりがあらわ期待している。可視化という手法を通じて、人々に神様の存在を感じてもらおうきっかけになれば」

大学で建築科へ進学するも、模型作りなどの手先を使った作業が性に合わなかった。一方、

世界と新分野を舞台に



松井さんは6年のサラリーマン経験を経て独立。幅広い分野のプログラムを開発している

松井さんは6年のサラリーマン経験を経て独立。幅広い分野のプログラムを開発している

講義で学んだプログラミング技術に魅力を感じ、のめり込んでいった。「SEの仕事は、いわば大勢の人間が時間をかけてやってきた作業を、より効率的にする仕組みづくり。単純作業が苦手な性格にも、ぴったりに合った。大手電機メーカーを経て、外資系コンサルティング会社に就職。数々の新規サービス開発を成功させ、2018年に独立開業した。

会社には、起業仲間やその紹介により、多くの依頼が寄せられる。依頼主の製品を開発するだけでなく、コンサル時代の経験を生かし、依頼主の業態の展望も考え提案を加えることも多いという。少数ながら仕事を充実させている。一方、自身の特技を生かし、少しでもお金の活動に貢献したいと考えてきた。半年前から毎

週、近隣の若い教友を対象に、IT人材の育成に取り組み。「効率化することで、多くの時間や人手を生み出せることがITの魅力。お道の活動においても、ITを活用した新たな取り組みを進めていきたい」



客室乗務員として、世界を飛び回る赤穂さん

アイソフトウェア株式会社(東京都千代田区)の代表を務める松井圭(33歳・西新井分教会)は、後継者・山口県宇部市は、システムエンジニア(S/E)として、モバイルアプリケーションやWebサービスを開発している。大学で建築科へ進学するも、模型作りなどの手先を使った作業が性に合わなかった。一方、

伝統工芸から最先端の科学技術まで、さまざまな分野で夢を描き、高みを目指す、新世代の「はたらく、ようぼくたち」。胸に抱く憧れから希望の業界に入り、時に挫折を経験しながらも、信仰を心の支えに未来へ踏み出す若人10人を紹介する。(文中、敬称略)

信仰を心の支えに 若人は高みをめざす



染物職人の廣瀬さんは「挑戦することが、次の時代へと受け継ぐことにつながる」と語る

を取得。お米の魅力や血糖値の上昇を抑える食べ方を付加価値として提供。販路は着実に広げている。「作物は繊細。少しでも水の管理や除草を怠っただけで、出荷できなくなる。だからこそ、手間暇かけて作ったものを、お客様に認められたときの喜びは」といふ。一日でも早く、オンラインから技術を吸収したい

埼玉県川口市の洋妻・吉に勤める福島千鶴(29歳・瑞玉分教会教人)は、小学時代からパティシエを夢見てきた。高校卒業後、天理教専修科を経て専門学校で製菓衛生師の資格を取得。現在は所属教会の御用をつとめながら、同店のパティシエとして働いている。「毎日同じものを作るのは、いても、お客様が口にするのは一つ。すべての方々に幸せを提供できるよう、一つひとつに心を込めている。いかに均質な商品を作るかが、プロとしての腕の見せどころ。気温や湿度で変化する素材の状態を調整し、焼き具合などを細かく観測する。また、教会で毎月開催している「12も会」でも、料理スタッフとして腕を振る。コロナ禍の現在も、定期的な子供たちにお菓子を届けているという。「見た目も楽しめるものなので、テクノロジーの技術を生かしてに磨きたい。私の姿を見て、パティシエになりたい夢を抱く子供たちもいる。少しでもその後押しができれば」

大阪市の淺井綜合法律事務所勤務する、弁護士科榎貴広(34歳・龍見分教会)も、約200件の弁護を担当している。両親の一人の役に立つ仕事に就いてほしい」という思いを受け、大阪大学法学部へ。司法試験に合格し、平成26年に弁護士登録した。ところが、依頼人の声に耳を傾ける中で、人間関係のこじれや、騙し騙れの世界、を自らの当りにし、一時は体重が8.5kgも落ちた。そんなとき、教祖がどんなに母親のように心を尽くして守られた姿が浮かび、何度か救われた。いまでは、どんな仕事も、神様の御用だと思いで、依頼人とその家族心のケアにも力を尽くしている。

「親の家で総合内科シニアレジデントとして勤める池田直子(29歳・近光洋分教会)もよく天理市。「実家は田代町で、大きな病院はなかったが、小さな病室やけがでも気軽に相談できるかかりつけ医がいた。誰にでも親身に寄り添う姿が憧れた」。現在は、入院患者の受け持ちや救急外来、生活習慣病のケアなどに従事している。その中で、一人ひとりの状況に合わせた関わり方を模索している。「たとえ病を飲んでくれた患者さんがいたとき、『きょうと飲んでください』で終わらせるのではなく、その人の生活背景を丁寧に尋ねていくこと

で、薬を飲まない本当の理由が見えてくる。いつも心に余裕を持って仕事に臨めるよう、自身の体調管理にも気を配っている。大学で産業医学を学んでいたこともあり、将来は産業医となる道も視野に入れている。一人ひとりの健康を見守り、長期的な関係を築いていく点では、かかりつけ医に通ずるものがあると思えるからだ。「その経験を活かし、小さなことでも安心して相談してもらえる医師を目指したい」

横濱市の公益施設で騎乗員兼販売員として勤める小山理恵(28歳・多摩濱分教会)は、幼いころから馬が好きで、帝京科学大学生命環境学部へ進んだ。その後、静岡県御殿場市の乗馬クラブで働いたが、過労により体調を崩した。知人の勧めで志願した修業科では、周囲の人が本気で土を履き、周囲の人が中々教える素直さには驚きを感じた。「次は私が人を支えたい」と思ふようになったという。やがて、現在の職場に採用され、求職者が集まる馬の世話や調教補助を担当。その中で、「馬に触れているとき、生命の根底にある親神様の守護を強く感じる。馬を心から信じることが、馬は必ず受け入れてくれる。これは人間関係にも通じる」と話す。現在は仕事の傍ら、以前から憧れていたホースセラピーも馬のセブンデューカリヤについても独自に学んでいる。「人や馬を通して、真のつながりに気づくことができました。馬と共に歩きたい」といふ。馬の心を癒やすホースセラピーに注目する小山さん(下)

遠目には無地だが、近づくと繊細な模様が浮かび上がる。江戸の粋が詰まった伝統技法。江戸小紋。廣瀬雄一(40歳・創祥分教会)後継者。東京都新宿区は、廣瀬染工場 の四代目。幼いころから工場に入り、匠の技を自らの身に刻み取ってきた。40代が職人としてのピークとされるこの世界。「お父の言葉を受け、大学卒業後、修行の道に入った。ところが、主として着物に用いられる江戸小紋の需要は年々低下。仕事が減っていく状況に直面し、次の時代へ残していくためには、まずは少しでも多くの人に生地の魅力を知ってもらうなければ」と危機感を抱いていた。

伝統と技術を受け継ぎ



農業の道に飛び込んだ和田さん。作物と日々、向き合う(左)



池田さん(上)としての医師像はわかりやすい。患者と親身に向き合う日々(下)



池田さん(上)としての医師像はわかりやすい。患者と親身に向き合う日々(下)

池田さん(上)としての医師像はわかりやすい。患者と親身に向き合う日々(下)

滋賀県内の自営農家に、弟手入りし、いまは後継者として農業に従事する和田広照(30歳・湖濱分教会)も、東近江市。元々ものづくりに興味があり、自然好きも高じて、農業の道に飛び込んだ。「お父さんからのサポート。身に付けるべき知識や技術はあまりにも膨大で、一時は「農業に向いていない」と厳しい言葉をかけられたこと。生物は米、野菜、花など幅広い。農学を修めた60代のベテランオナーから手ほどきを受けつつ、現在は主に販売面を担当。地域に密着した、顔の見えるサービスを提供したい」との思いから、あえてアナログなボスティング営業を選び、注文が入ればら配達する。また、お米の良さを伝えるために「こはんソムリエ」の資格



農業の道に飛び込んだ和田さん。作物と日々、向き合う(左)



池田さん(上)としての医師像はわかりやすい。患者と親身に向き合う日々(下)



池田さん(上)としての医師像はわかりやすい。患者と親身に向き合う日々(下)

池田さん(上)としての医師像はわかりやすい。患者と親身に向き合う日々(下)